

草戰爭記

7
3
209



4
5

1644



天草戰爭記序

我國寛永の年間徳川三代將軍の時肥前の國天草島一揆蜂起し餘日天下の大軍を引受けて屢々戦ひを挑

みしは天草時貞を始とし芦塚千々輪大矢野など一騎當千

の強勇あれば智臣と稱せし板倉公さへ無慙や駒木根が砲玉

も最期を遂たり、然れども天命遁るゝ可らと北條氏が軍略

にて竟に殘らず滅亡たり嗚呼稀代の騒動と謂べし

無腸居士誌



天草四郎



森宗意軒

○發端

抑も我邦寛永の頃肥前の國天草島といふは九州の最端八十島の内天草は大なる島として收獲五万石餘ありて郷村百ヶ村に近し此所は唐津富岡の城守寺澤志摩守が領分として最も福有の所なり然れば關ヶ原の殘黨大坂の餘類等世を憚る納此島は住居とる者多し。爰に芦塚忠右衛門森宗意軒大矢野作左衛門天草甚兵衛千々輪五郎左衛門天草玄察赤星宗範渡邊小左衛門等の浪士あり皆な大坂の殘黨にして何れも一騎當千の勇士なりけるが密かに此島へ住居を定め時あらば

兵を起し徳川氏に敵對せんと各々謀叛を企てける。時に芦塚忠右衛門は森宗意軒と工夫を運らし當時嚴禁ありし切支丹の宗門を。此天草に弘めんととて(宗意軒は壯年の頃南蠻國へ渡り切支丹の宗門に入りて宇留岩破天連より種々の幻術を授かり日本へ歸し者なり) 諸も森大矢野千々輪赤星芦塚の面々は近郷を歩き奸計を以て愚昧の人民を惑はし切支丹の宗門へ引入んとす中にも森宗意軒は妖術を以て我が体より光を發ち或は虚空へ立ち又は水上を渡る等さまくの奇術を行ひ見せければ五十三ヶ村の老若男女忽ち之に歸服し



て「死后生天破羅韋増雲善主曆」と一心に唱へける。然れば
 森宗意軒は大江村の年寄共と評議して敷を伐開き俄に拜殿
 を修築し彼の基督の本尊を移し佛具を飾り香花盛物を供へ
 恭しくして宗徒を之に參詣せしめければ倍々切支丹を信仰
 する者多く日々老若群集して立錫の地もなかりける
 去程に此地の庄屋年寄共は芦塚千々輪等が難ふ欺かれ既
 開帳場の如く上下袴を着用し毎日此場は結合ければ農民等
 は彌々信じ金銀米錢を奉納すること夥し依之六人の者は
 仕請したりと大に悦び世話人の者へ談合ひ一切此場の支配

を引受密かに金銀米錢を我物となし武器の準備を爲したり
 ける然るに惡事千里を走るの譬にて富岡の城代三宅藤右衛
 門方へ此由聞へければ大に驚き郡奉行越智茂右衛門中西重
 左衛門を召て耶蘇宗徒の巨魁を捕縛んことを命じたり依之
 直に代官三人足輕二十人を引具し大江村へ馳來り群集を押
 分て本尊の前より到り不届の奴原哉御法度の宗門を斯く尊敬
 せること免し難しと佛檀へ飛上り基督の書像を取て引裂さ
 地上へ投捨たれば農民共大に怒り數十人棒を携へて彼の役
 人を追取卷郡奉行二人代官三人を打殺しける

時に寛永十四年八月十一日天草在々村々の農民共一揆蜂起
 し其人數集ること八千三百餘人に至る總大將は天草四郎時
 貞軍師は蘆塚忠右衛門其外持口くの大將分は千々輪五郎
 左衛門大矢野作左衛門赤星宗範天草玄察森宗意軒鹿子木左
 京天草甚兵衛駒木根八兵衛千束善衛門蘆塚忠太夫同左内
 楠浦八兵衛大江治兵衛布津村代右衛門四鬼丹波等の面々な
 り然れば唐津の城代原田伊豫は此騒動の注進を聞き大に驚
 き早速江戸表へ注進及び同年八月廿一日總勢二千餘人を
 引率して天草へ發向し島子平渡の港に着し暴徒の動靜を窺

ひ居たり。然るに其夜丑滿の頃一揆の輩八方に手配り備りたれば同村の人家へ悉く火を掛け城代原田を討取んと各々竹槍を携へ總人數一千八百人。千々輪五郎左衛門蘆塚忠右衛門大將として打て蒐れば唐津の軍勢大に驚き不意を打れて狼狽なし右往左往に亂れ立つる中も島田十左衛門小寺重藏柴田彌左衛門の人々は戦場數度の勇士なれば群り立たる一揆の中へ槍追ッ捨つて突て入り無二無三に突倒せば續いて竹中善衛門深木七郎右衛門西田七太夫等一騎當千の面々も追々これに馳加はり縦横無盡に荒廻れば一揆の輩此勢ひ

に恐を爲し一度に哄と崩れたり。去れば大將千々輪五郎左衛門齒嚙をなし自から三尺五寸の大太刀を打斃して唐津勢の眞正中に切て入り眞向梨子割車斬り當るを幸ひ確立く斬り廻る此時蘆塚下知をして進めやくと勇むれば農民等は取て返し千々輪が働きに力を得て一度に撞と押掛れば唐津の軍勢散々に討なされ城代原田を守護なして濱邊の方へと退きたり

去程は江戸表將軍家には此度の騒動注進矢を射る如くなれば拾置がたく御三家御家門を始め諸役人總登城にて大評定

を開き近國諸大名へ下知を傳へ軍令を正し板倉内膳正之れ
 が総大將と爲り軍勢一万八千人武威を輝かして發向し同年
 十月廿五日肥前國島原へ着陣す此時諸方御下知有て長崎御
 代官馬場三郎左衛門は長崎表を堅固に守らせ又寺澤細川
 の兩家は島原の討手は向はせられ備又近國の大小名の一
 揆追討の爲め追々此に出陣せらる。依之一揆の奴原は此勢
 に恐をなし降參に出べきと思の外微少も恐怖る景色なく蘆
 塚忠右衛門指圖を爲し此度大軍を引受戰を爲とは九州の
 内原山の古城ころ屢竟なり急ぎ彼の城へ引籠るべしと。夫



十三

より農民に下知を傳へ十月十四日の早天は總勢二万二千余
原の古城へ籠りける

倍も官軍方には城攻の合戦數度交ゆると雖も更に落城の色

なければ板倉内膳正殿大に憤り諸將を令を下し明日は必

そ總勢を押し出し一揉に揉潰さんと。明れば寛永十五年正月

元日寅の一天に兵を發し先陣は寺澤兵庫頭松倉豊後守二番

は黒田右衛門佐三番は立花左近將監等なり扱又板倉内膳正

殿は手勢一千五百人を引卒し間を作つて眞一文字を攻上れ

ば是を見たる寄手の諸軍牽總大將の先陣は進まれたるぞや

我等らとと鯨波を發し曳々聲を揚て推上る

城中三の丸の大將千々輪五郎左衛門是を見て素破や寄手の

總軍必死と成て攻上るぞや今日の戦は命限り拒ぐべし逆

此由諸將へ觸廻せば蘆塚忠右衛門其外の面々此所へ馳集り

鐵砲を兩霰の如く撃立く又雜人共は大木大石を投出し必

死と働く有様は凄まじく社見たりける此時板倉の軍勢は楯

板を振翳し英々聲にて攻上る中にも大將内膳正は萌黃威の

鎧は鐵形打たる龍頭の兜を着し士卒を下知して馬を縦横に

乘廻せば鍋島立花の兩勢も總大將を撃となど揉揉んで挑

み合ひ赤星宗範四鬼丹波楠浦八右衛門等を討取たり。蘆塚
 忠右衛門此体を見て素破一大事なりと大に驚き駒木根八兵
 衛を近く招き急ぎ板倉公を討取べしと有ければ駒木根心得
 たりと鐵砲追取十匁玉は強薬を込め高みより狙ひ澄し近寄
 處を撞と放せば過たず板倉公の胸元へ血煙り立て撃込ぐり
 隣むべし板倉公は駒木根が爲に討死す之に因て寄手の面々
 今日之戰は是迄なりと銘々軍勢を引纏め已が陣所へ引揚ら
 れたり。

諸も板倉内膳 正討死の後。松平伊豆守跡役となり當所へ下

向ありてより屢々合戦及ばれしが蘆塚が軍配賢くして容
 易よ之を攻滅とこと能はず空しく對陣なし居たり。然るに
 北條安房守將軍家の命を蒙り軍師として二月廿六日鳥原へ
 着陣と是より諸軍へ手配り行届き。明れば二月廿七日卯の
 上刻に出陣と別て此日は朗晴なれば旭は海面に輝き渡り雲
 井の雲雁は聲を限りに舞遊ぶ實類なき景色なれば寄手の人
 々之を見てアラ麗なる春色哉と不覺よ心浮立折しも鍋島甲
 斐守は水色威の鎧に金の唐冠の冑紅の母衣を掛け青毛の
 駒に打乗て山の尾崎を眞一文字に馳登れば續いて榊原飛彈

守は桃色威の鎧に淺黄の母衣を掛け我劣らじと馳上る奇手の諸軍之を見て那は御軍監の兩名なり撃すな續けと二萬餘人我先にと攻上り大箇を揃へ楯を衝疾鉄砲を打掛るに黒田細川立花小笠原等の面々驚破や兩家には軍令を背き一番乗と覺へたり各々後を取給ふなど一時又吶と闘を作り我先にと押登る總大將松平伊豆守に此体を見られて大に驚き是は軍令を破りたり以の外の事なりと御使番を以て早々人數引揚べしと制それども總軍十七万人の事なればなか／＼聞入氣色なく山岳樹木を震動し天地も崩るゝ勢ひなれば之を制



ひる事成難く少間見合せ居られたり扱又一揆の輩を城中より此体を見て素破や今日の合戦容易ならずと忽ち鉄砲を打掛棒火矢を放ち又松山に居並ひて大石大木を投落し暫く此處に防げども鍋島甲斐守は少じも恐れず鬼神の如く勇立ち落來る材木を足掛りとなし城中へ社乗入たり續いて旗本二萬人同じく城へ飛入突入獅子の荒たる如くにて一揆の奴原を薙立れば一揆の首領柄本左京佐志木佐志衛門是迄なりと堤より立出大身の鎗を引絞り鍋島の勢へ突て入る續いて千々輪五郎左衛門天草玄察同甚兵衛駒木根八兵衛布津村代右衛

門等寄手の諸軍へ割て入り火花を散して戦ふ折柄十七萬の官軍の大半城へ乗入て東西へ火を放せば忽ち之が燃上り出丸二の丸三の丸残らと火中と成たりける。此時蘆塚忠右衛門同左内忠太夫森宗意軒大江治兵衛其外一揆の大將分去來戦ひも今日限りと各々討死の覺期を究め潔よく死出の働きを爲べしと柄物くくを追取て嚴敷下知を傳へつゝ當るを幸ひ涉り合ふ。黒田細川鍋島立花小笠原等の軍勢も必死と成て戦ひたり
諸も一揆の輩今日の戦ひに敗を取り追々大將分の者討死な

し皆諸候の手に首級を上らる中よも軍師と頼まれし蘆塚忠
 右衛門は紺糸威の鎧に同毛の冑を着し二尺五寸の太刀を佩
 き十文字の鎗を小脇に抱込佐志木佐次衛門池田清左衛門を
 組頭として左右に從へ一揆四百人を跡に付け黒田が先手野
 々村浦上が五百人余の中へ眞一文字に突入たり。寄手は思
 ひ設ぬ事なれば右往左往に突立られ籠を指て敗走す芦塚是
 を追討し坂下屹度見て有ば惣大將の旗山風に翻懸けるよ蘆
 塚最早日頃の願ひなり常春板倉殿を打取今又伊豆守殿を黄
 泉へ同道なせば此ともなき仕合なり勇めや者共と驚直に押

下る諸家の軍勢は皆山上よりありつれば今城兵の麓に下るを
 誰有て喰止る者もなし然る處よ松倉家の家老松倉重兵衛は
 主人を勧め此一揆原一人も残らず打取て高名せんと二百余
 人谷道の横合より打て掛れば蘆塚は願ふ處と松倉を只一駿
 に追捲るに松倉家の勢は勞れ武者と思の外死者狂ひの一揆
 共に追立られ猫に逢たる鼠の如く谷々へ捲り落され見苦か
 りし形状なり此混雜に打紛れて一揆の組頭佐志木佐次衛門
 は足踏外し谷の木塵と成にける。芦塚は一揆三百余人を引
 卒し手負猪の如く暴廻を伊豆守が家老深井藤右衛門士卒に



下知し鐵砲てつぱうまで打取うちとれと大音揚たいおんあげて呼よばれば即時うくにに一揆いつせ十人討じゅうにんばか
 り將基倒しやうきたをしに打うたれたり。芦塚怒あしづかいかつて大音たいおん天下てんかの征討せいとう使したる
 松平伊豆守素肌すはだかの百姓共ひやくしやうどもが武勇ぶゆうに恐れ飛道具とびだうぐを用もちひ玉ふは
 何事なにごとぞや手詰てづめの勝負仕しやうぶしたまへと眼まなを怒いららせ呼よはる内後うちごの方
 より立花飛彈守總大將たちばなひだのかみを討うたすなど鎗やりを組くみでぞ追來おしきたる蘆塚あしづか是
 を屹度きつと見て鐵砲てつぱう受うて死しんより此槍襖このやりを打破うちやぶれと眞先まっさきに立たて
 突入つきいれば一揆いつせ原はらも太刀たちを以もつて忽たちまち鎗垣やりがきを切崩きりくづし矢庭やはばに七八人
 を切倒きりたばせと立花勢たちばなせいは芦塚あしづかと見切みきり其上そのうへに落城らくじやうしたる事ことなれば
 短兵急たんへいきう攻戰せめたふ芦塚あしづか今は是迄これまでなりと近寄敵ちかよるてきを切拂きりばらひ大岩おおいわの

上うへに飛と乗り大音揚たいおんあげて呼よはりけるは我われは元來げんらい小西攝津守行長こせいつくしなもりゆきながの臣肥後國宇土しんひごのくにうぢの城代じやうだい芦揉忠あしづかちゆうぢ兵衛べいゑが長ちやうなん男當時おとこのとき一揆いつぎの元帥げんすい蘆塚忠右衛門あしづかちゆうゑん今年六十一歳ことしむそいさい眞實まことの武士ぶしの最期さいごを見よと太刀たちの切先口きつさきに加くわへ谷底目掛たにうちめかけて眞逆様まづさかさまに飛入とひいたり惜たしひ哉蘆塚程あしづかちやうの勇士ゆうし眞まことの道みちに仕つかへなば武士ぶしの鑑かみと成なるべきと天理てんりに逆さかひて悪名あくめうを後の世のちよまでも残のこしける

去程きよほろに一揆いつぎの總大將そうだいしやう天草四郎時貞あまぐさしやうじさだは伯父おぢ甚兵衛じんへゑを始はじめとし一揆いつぎ五百人いんそつを引率いんそつし天主教てんしゆの旗はたを押立おしたてて鯨波きんぎを作つくり馳向はせむかふ寺澤てらさわの家老うちやうぢ三宅藤右衛門みやけふぢ是こゝを見て打漏うちもらされの一揆いつぎ共何程ともなほの事こと

や有あり自身じしん眞先まづさきに進すすみ戦たたかひ又細川家またほろかはけの大軍たいぐん四方はうはち八方はうぱうより取とり圍かまみ柔立もみたてし戦たたかへ共天草四郎ともあまぐさしやうを始はじめとし必死ひつじを究きめたる者もの共ともなれば打共うてあまぐさしやう斬共きりあまぐさしやう事共ことあまぐさしやうせず八方はうぱうは確立たかたてし切結きりむすふ然され共目ともめに余あまる大軍たいぐんなれば遁のがれ去さるべき途みちとてなく皆々みなみな討うちられて死ししたりける。此時このとき天草甚兵衛あまぐさしやうは天草四郎あまぐさしやうに打討うちむかひ斯大敵かくたいてきとなる上うへは最早もはや心命しんめい是迄こゝまでなり何卒なにぞぞ此場このばを切破きりやぶり荒神くわうじんが洞ほらへ引揚ひきあげて快こゝろよく自害じがいすべしと勸すすむれば四郎しやうは實げんも同意どういして打破うちやぶらんととる處ところへ鍋島勢なべしませい押掛おしかり一揆いつぎ巨魁きよけいと見受うけたり夫遁それのむすなど追取おとどり巻まを四郎しやう甚兵衛物じんへゑものともせと縦横じゆうぢやう無盡むじんし荒廻あれまわれと身体しんたい疲つかれて



戦ふ能はず終に總軍の中に討死と之に因て一揆残らず滅亡
 したり。扱又落城跡取片付に依て總軍勢松山を下り高久の
 城に入る又征討使の下知も仍て陣營を悉く取拂ひ生捕は追
 て糺明有べし迎近郷の百姓共を呼寄其近邊の掃除をさせ又
 山上の死骸は皆谷へ落とし捨雜人共の屍は一ツ穴も埋させ全
 く平定せし旨江戸表へ注進に及びしかば北條殿發向以來不
 日に落城爲せしは偏に同氏の軍器に依る所と諸人之を賞賛
 しける

天草戦争記 大尾

いろは教育はなし

全七冊
正價六十錢
郵税六錢

此書は古く翫弄ふいろは短歌を解釋し次で勸善懲惡を論じ
 専ら修身の道に誘へる滑稽諧謔にして奇々妙々なる一話を
 掲げ末に其眼目となる摘要を加へたる珍篇なれば小學の兒
 童一回巻を開くときは抱腹絶例知らず識らず家庭の教育と
 なるべき最良の書なり

全 明治廿二年五月十五日印刷
年五月二十日出版

定價金拾錢

東京下谷區御徒町壹丁目六拾六番地

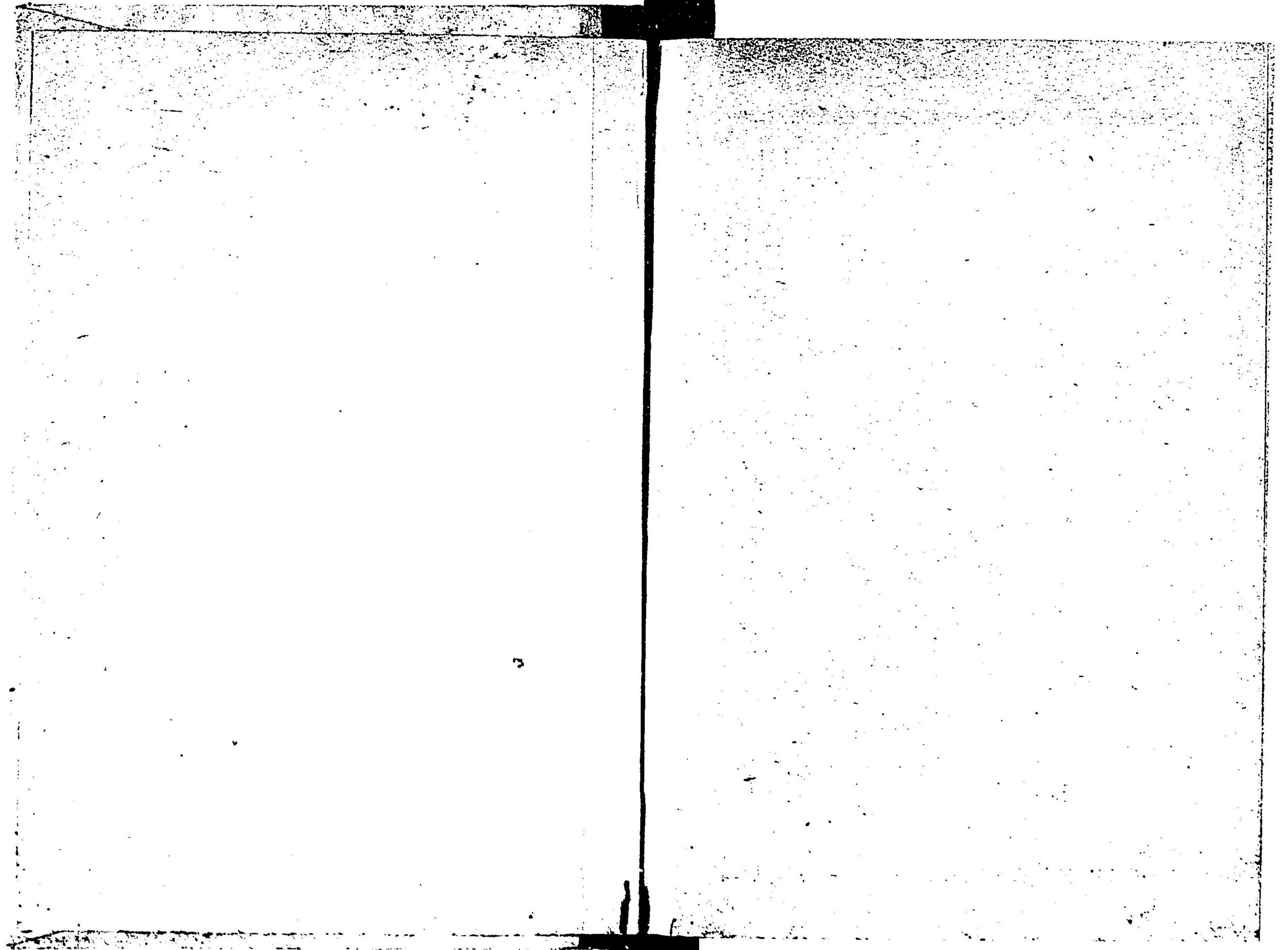
編輯兼 發行者 三輪逸次郎

全 神田區柳原河岸第十一号地

印刷者 大場沃美

全 下谷區御徒町一丁目六拾六番地

發兌 いろは書房



4

5

091919-000-9

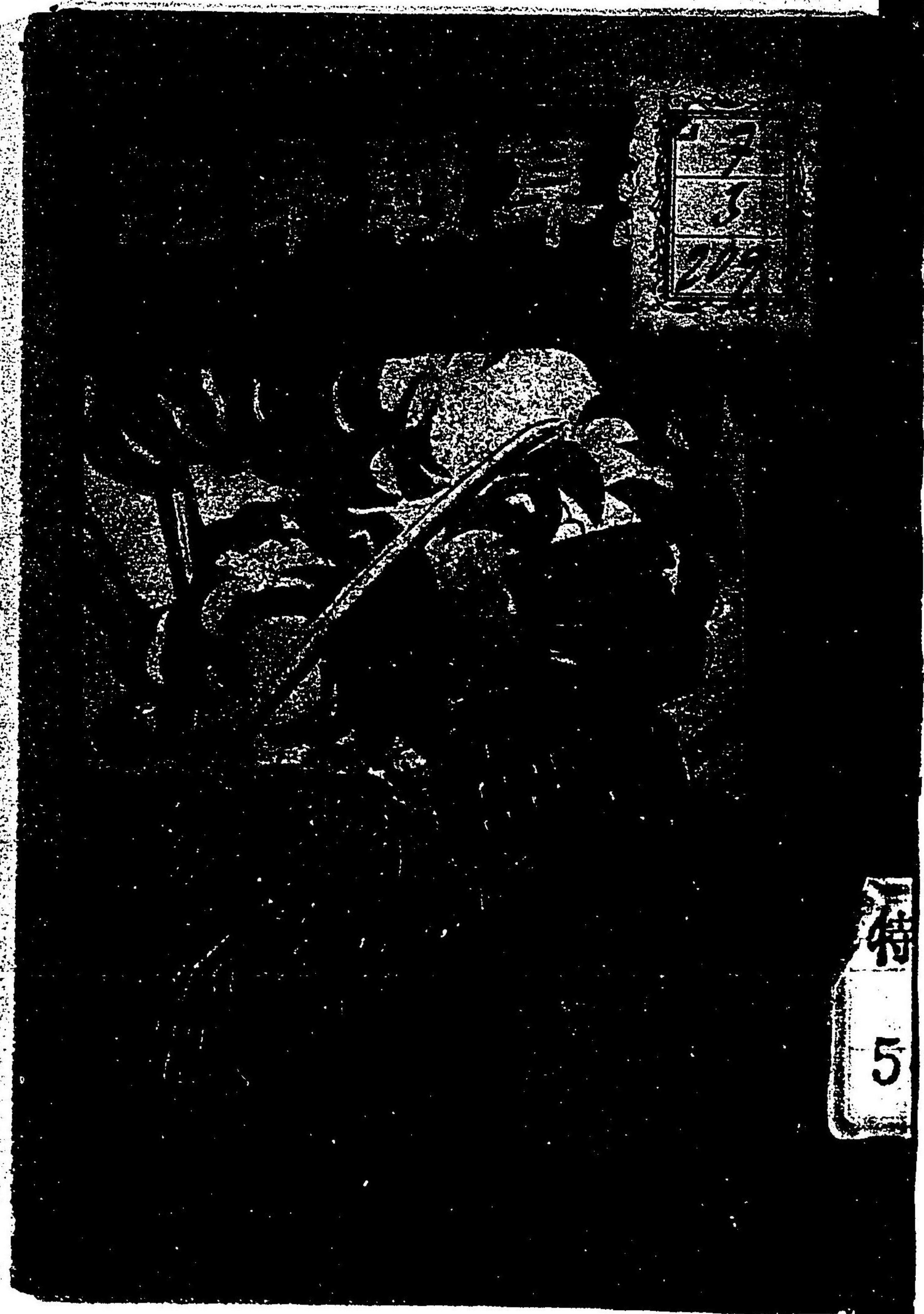
特64-545

天草戦争記

いろは書房

M22

DBP-0028



特
5